

## 保育者の省察(1)

吉村 香

保育者は子どもたちが幼稚園もしくは保育所から帰った後、実に様々なことを考え、思いをめぐらす。その内容や考える行為を指して筆者は省察と呼んでいる。

四歳児を担当しているY先生の実践と省察をとおして、保育者の省察について考えてみたい。

四月、新学期が始まってまもないある日、リョウとノブ男という日頃仲のよい二人が、やりたい

あそびが食い違って険悪なムードになっていた。

二人とも下を向いて口もきかず、そうかといって

離れるわけでもなく、どうしていいかわからない

様子でいる。それを見たY先生は、二人に近づいて

「どうしたの？」と尋ねた。どうやらリョウは

いつものようにノブ男と二人で庭であそびたいの

に、ノブ男の方は自分一人で剣をつくりたいらしい。

二人ともそれぞれ、相手に対して気まずい思

いを抱いているようである。

Y先生は事情を聞いて「違っちゃったわねえ……」と困った顔をした。そして両者の意向をどちらもかなえることは無理だと判断し、リョウが一人で庭へ行くよう促した。Y先生は後から自分も庭へ行くことをリョウに約束した。そして元氣のないリョウが黙って外履きに履き替えるのを手伝い、庭への出入口で「行ってらっしゃーい」と手を振ってリョウの後ろ姿を見送った。

ノブ男は部屋の中央の製作コーナーで黙々と念願の剣づくりにとりかかった。

しばらくすると、庭であそんでいたリョウが部屋にいたY先生を誘いに来た。Y先生は他の子どもたちの「紙ちょうだい」「これやって」といった呼びかけに応じて忙しく動いていたが、「ごめんね。先生リョウちゃんと庭であそぶって約束があるから」と言って庭へ出ると、リョウと二人でしばらくあそんだ。

実践の事実はこれだけのことだ。よくある仲たがいと考えればあまりに些細な出来事である。けれどもY先生の心にはいくつもの思いが残った。子どもたちが帰るとY先生は、その場面を思い起こして次のように省察した。

リョウとノブ男は同じ他の幼稚園に通っていたが、この四月からこの幼稚園へ移ってきた。新しい幼稚園という慣れない環境で二人は寄り添い支え合うようにしてこの二週間あまりを過ごしてきた。そんな二人が今日はやりたいあそびが食い違い、リョウの誘いを「断った」ノブ男も、ノブ男に「断られた」リョウも相手に対する気まずさを感じてしまった。リョウは今まであまり「せんせい」「せんせい」と言わない子どもであった。そのリョウが、ノブ男と一緒に庭であそびたいのにノブ男が誘いにのってくれないことを、今日は私に訴えてきた。私はそのリョウの切迫した助けを

求める声になんとかして応えたかった。援助がしなくて仲介に入ったのであった。それなのに結局、ノブ男に無理を強いるわけにもいかず、リョウは「残念だけどぼく一人で行くよ」と言うので見送り、私も後から庭へ出てひとしきりリョウとあそんだのだった。

Y先生が保育直後に想起したのはこのようなことであった。

保育者は子どもたちにとって頼りになる人である。友だちとの関係が思うようにいかず困惑したり気まづくなった時、助けを求めることのできる最も身近な大人として存在しているからである。

しかし子どもたちは時として、先生のことなど見向きもせずにあそびこんでいる時間もある。それは個人差でもあり、また一人ひとりにとっても時期により状況により先生を必要とするか否かは様々に変化する。それでもひとたび困難に出くわ

すと、やはり先生の援助が必要になるものだ。

リョウも入園以来ノブ男と寄り添って二人仲よくあそびを共有していた時には、先生をあえて必要としてはいなかった。けれどもノブ男が自分とは別のあそびに目を向け、興味を抱いて自分から離れようとした時、おそらくリョウは心細くなり困惑したことだろう。そして思わずY先生に「せんせい」と呼びかけたのだと考えられる。

Y先生はリョウの発した信号を感知して、なんとか力になりたい一心でノブ男との間に入ったという自分の実践の根拠を振り返った。リョウの思いをかなえてあげられなかったため、せめても自分が後から庭で一緒にあそぶ時間をつくったことも意識化した。保育が終わって静かになった部屋でY先生が省察したのは、そこまでである。この時点でのY先生は、最終的にリョウと一緒に庭であそんだという自分の行為によって、実践を肯定的に評価していたのである。

通常省察は実践直後にのみ行われるため、Y先生の省察も、ここで終わればこれだけのことであったかもしれない。

だがそれから九か月後、三学期が始まってまもない頃Y先生は、再び前述の場面について省察する機会があった。その時Y先生が省察した内容は次のようであった。

なぜ私はリョウを一人で庭へ送り出し、自分は部屋に残ったのだろうか？ 後から庭へ出てリョウとあそびはしたが、その場で一緒に行かなかったのはなぜだろうか。リョウとノブ男のうち、自分の思いがかなわなかったのはリョウの方なのだから、リョウの気持ちのフォローを最優先してすぐに庭へ出るべきだった。

しかも保育後にそのことを悔やみもしなかった。「すぐに行きたくても行けなかった」理由がたぶんその時にはあつて保育中の実感が残ってい

たから、後悔もしなかったのかもしれない。でも今になってみれば自分の行為の意味がわからず納得できない。

Y先生は半年以上たつてもう一度、ある日の小さな一コマを思い返してこのような省察を行った。そして自分の行為の意味に疑問を抱き、記録を読み返したり筆者の録音していた保育中の録音テープを聴くなどして、事実をひもといてみた。

すると、リョウを庭へ送り出した時、Y先生の周囲に「せんせい」「せんせい」と言つて何人も子どもたちが集まっていたことがわかった。子どもたちは口々に「○○つくつて」「△△ちょうだい」などとY先生に要求を投げかけていたので



ある。過去の事実を可能な限りひもとくことで、Y先生は「すぐに行きたくても行けなかった理由」を知ることができたのである。だがそれでも、リョウの心情を思うとやはりその場で一緒に庭へ出てあそぶべきだったとY先生は考えたのであった。

事実には納得してからさらにY先生の行った省察は次のようなものであった。

あの時私は「一緒に外であそんでほしい」というリョウの思いを感じてはいたが、それよりも「これして」「紙ほしい」といった具体的な要求に応えることを優先させたことがわかった。

保育者は一度に何人もの子どもたちから「せんせい」「せんせい」と呼びかけられる場面が多い。話したいことを話してそれで満足して他の場所へあそびに行く子どももあれば、何かしらの要

求をしてくる子どももあ

る。口々に発せられるこ

とばの洪水の中から今、

ここで自分が誰の呼びか

けに応えるべきか、次に

どうしたらいいのかを、

瞬時に判断することを迫

られるのである。

保育場面での直観的な判断は、無意識のうちには保育者の個人的な価値観を反映すると考えられるが、往々にしてその価値観の質を保育者自身は気づいていないものである。Y先生も前述の場面で、なぜもつとリョウの心情への具体的な配慮を優先しなかったのか、自問自答してもわからず、

事実を詳細にひもとくことでようやく自分の判断基準を理解し納得することができたのである。

保育者の省察は本来ひとりでも内省するものであれば当然、極めて主観的な思考となる。それを否



定的に考える人もあるが、筆者は主観が悪いとか、役に立たないとは思わない。ただ、保育者が主観すなわち自分のものの見方、考え方を、対象化して把握しようとする努力を欠くと、不毛な主観に終始してしまう可能性があるのではないだろうか。また、自己満足で終わってしまう可能性も考えられる。

保育実践は同じ場面が二度と起こらないという意味で、実践の一回性が特徴の一つといえる。けれども省察は一度の実践について何度でも行うことができる。Y先生のように一つの場面について省察する度に視点が新たになり、前回の省察で看過していた部分に気づき、改めて疑問が生じることもある。

方法としては第三者に相談し、意見を求めることもできるだろう。けれども、保育者自身が異なる視点から何度も省察して気づける部分もあるということを、ここで筆者は強調したい。

多角的な視点から保育場面を想起し、省察を重ねることで子どもの現状や保育者自身の見方、考え方がみえてくる。それは省察を行う度に主観が磨かれ、同時に自分自身や実践をより対象化することで省察内容の客観性が増すからだと考えられる。

\*本文中の子どもの名前はすべて仮名である。